

住まい断熱で健康に

松山・改修考えるシンポ

住宅の「温度環境」を良くすればさまざまな疾病の予防になる」との観点から住宅改修を考える「『健康とすまい』のシンポジウムin愛媛」がこのほど松山市であり、建築や医療の関係者ら約120人が高断熱住宅について学んだ。県内の建築業者らでつくる「えひめ健康・省エネ住宅推進協議会」の主催。

壁や天井に断熱材を用い、隙間を少なくして気密性を高め、熱が逃げるのを防ぐ。省エネ効果も期待できる。

シンポジウムでは、「健康・省エネ住宅を推進する国民会議」の村上周三会長（東京大名大学教授）が基調講演し、心疾患や脳卒中などの危険性が増す高血圧と温度との関係について解説した。

冬場に住宅内での循環器疾患の死亡者数が増え、ピークの1月には夏場の2倍超に上ると説明。山口県における居間の最低気温調査で、19

99年基準の断熱性能は無断熱と比べ5・2度高かったとし、これが2・2mmHg（全世代平均）分の血圧降下に相当すると試算して「食生活の見直しと同じくらい効果がある。疾患予防の意味は大きい」と強調した。

省エネによる家計負担軽減も計算。改修費用100万円の場合、29年後に光熱費削減効果が投資額を上回り、健康維持効果も考慮すれば16年で回収できるとした。

慶応大の伊香賀俊治教授（建築・都市環境工学）

「食生活改善と同等効果」 温度環境が影響 血圧に



住宅と健康の関係について、建築や医療の専門家が意見交換したシンポジウム＝松山市

は断熱改修の前後を比較した高知、山口両県での調査結果を報告。中には2週間の平均値が12mmHg下がった70代女性もいたとし、「高齢者ほど健康への影響が顕著だ。個人差も大きいため対象を広げて継続的に調べたい」と述べた。

パネル討論もあり、村上会長、伊香賀教授に加え、愛媛大の曲田清維副学長（住宅・住生活・住環境）、星の岡心臓・血管クリニック（松山市）の大谷敏之院長が登壇。地元の研究者や医者、建築業者が各業界を超えて、愛媛県の風土に合った理想的な健康住宅の在り方を見いだしていこうと、連携推進を確認し合った。（今西晋）